

企画委員会より

委員長 石川依久子

本年3月、高知で開かれた春期大会において、かねがね実務委員会から提案があった企画委員会の設置が総会で決議されました。

これを受けて企画委員会は直ちに行動を始める事になりましたので、その主旨と内容についてここにご説明し、会員各位のご理解を得たいと思います。

3年間、模索、論争を重ねた藻類学会誌の新体制が今年度1号から発足しました。論争の中心は、藻類学会の財政が長期にわたって新体制を維持できるかという事でした。その他にも、新体制を維持するバイタリティーと余力が会員の中にあるかという事、今までの伝統的藻類学会への愛着から会員数が減るのではないかという事、国際的な理解と協力が得られるかどうかという事など、山積する懸念を抱えての発足でした。

ご存知のように、できあがった第1号は、見事な出来映えで、第1号を見る限り懸念の半分ぐらいは解消したように思われます。英文誌、和文誌の編集委員長の意気込みと努力が伝わってきます。

和文誌は旧「藻類」の伝統的あたたかさを大事にしながら時代の流れを認識した豊富な情報が組み入れてあります。英文誌は海外研究者との連帯を意識して国外への日本藻類学会のアピールをめざしています。

いままで国内の他学会から少々遅れをとっていた藻類学会が大きく飛躍した感があります。会員の誰もが一安心し、日本藻類学会を自分達のものとして育てていこうという新たな気持ちになったのではないのでしょうか。

ところで学会財政の方はそれほど余裕はありません。新体制が赤字をもたらす事はないという大前提のもとに発足した事はまちがいありませんが、雑誌が少しでも膨らめば赤字になる事も確かです。

そんなぎりぎりの線で新体制を踏みだすのは無謀だという意見は多々ありました。それが本当でしょう。しかし、藻類学会が低迷を脱して時代の要求に答えるためにはリスクを越える事も必要です。新体制の第一歩はすでに踏み出されました。

この上は、会員こそって日本藻類学会の発展を願って新体制を育てていこうではありませんか。

そんな思いを込めた一会員として、企画委員長などという大任を身の程知らずとは思いつきながらお引き受けしてしまいました。尤もこの委員会は資金集めをすべての目的にしているわけではありません。

藻類を普及させ、社会に、文化に、貢献していこうという、藻類学会が当然しなければならない啓蒙活動を企画する委員会です。企画委員会は、学会活動としての藻類の啓蒙活動を通じて収益金を得ようとしています。

啓蒙活動は、会員のボランティアがなければ成り立ちません。ボランティアの代償として得られたお金が、英文誌和文誌等の学会業務の支援に使われることになります。したがって会員各位のご協力がなければ成り立たないのがこの委員会です。

皆さんそれぞれに本職にご多忙の事と思いますが藻類を愛する人たちの集まりとして藻類学会を育てるとともに藻類をもっと普及させて行こうではありませんか。

当面、次のような二本立てで行事が企画されています。

1. シンポジウム、技術講習会、一般向き採集会・野外講習会など。
2. 藻類の絵はがき・スライド・CD・標本等の制作と販売、出版など。

また、次のような委員の方が軌道づくりと世話係に当たります。

藤田大介(富山水試)・濱田 仁(富山医薬大)・鳩貝太郎(国立教育研)・原 慶明(山形大)・片山舒康(東学大)・大谷修司(島根大)・田中次郎(東水大)・都築幹夫(東薬大)・横浜康継(筑波大)・吉崎 誠(東邦大)・渡辺 信(国立環境研)・渡辺真之(科博)